

一 般 演 題 抄 錄

10. 当院での最近10年間における 聴神経鞘腫33例の検討

古田 義博 金 章夫 内山 卓也
黒田 良太郎 種子田 護

近畿大学医学部脳神経外科学教室

神経鞘腫は全国脳腫瘍統計で約9%を占め、その90%が小脳橋角部に発生して様々の脳神経症状を呈する。この部位の手術は多数の脳神経が存在するため、これらの解剖学的温存と機能的温存が重要な点です。最近10年間の当院における聴神経鞘腫33例について検討した。

結 果

1. 性別 当院では全国脳腫瘍統計とは異なり男性19人、女性14人とやや男性に多かった。
2. 腫瘍部位 右側19人、左側12人、両側2人であった。
3. 腫瘍の大きさ 長径2—4 cmの腫瘍が全体の33%を占めた。近年MRIによる早期発見の影響で小さい腫瘍の増加、大きな腫瘍の減少傾向にある。
4. 分布年齢 40—60歳の症例が全体の33%を占め、中でも40歳以降に多かった。
5. 病悩期間 大部分は難聴を主訴に来院しているがその進行が遅いためもあり病悩期間は長く平均57カ月だった。20年と長期間の症例もあった。
6. 手術 全症例後頭蓋窩開頭法で行われ、7症例はtotal, 21症例はsubtotal removalがなされた。
7. 術前神経症状 30%に三叉神経障害、50%に顔面神経障害、全症例に聴神経障害が見ら

れた。他に耳鳴が36%、めまいが30%、頭痛が21%、小脳失調が27%に見られた。術後約90%になんらかの顔面神経障害が見られた。聴力が温存された症例はなかった。

8. 顔面神経障害の検討 顔面神経の解剖学的な温存率は49%であったが、実際的な機能障害は重度の症例が61%、軽症例も含めると90%に見られた。重度の症例に対して希望に応じ神経吻合術を追加した。解剖学的に温存された症例だけを検討すると軽症ではあるが62%でなんらかの障害が見られた。また、長径3 cm以下の小腫瘍例に限ると解剖学的な温存率は71%と改善し、神経吻合術を要するような重度顔面神経な障害はなく、軽度な障害が62%に見られた。

結 論

聴神経鞘腫の外科的切除に関して顔面神経の解剖学的温存率は近年向上してきたが腫瘍の術中剝離時に機能的損傷を受けやすく、術後に機能障害を生じることが多いと考えられる。機能的な温存率を向上させるには術前のアプローチの十分な検討、手術中の神経刺激装置の使用によるモニタリングの駆使だけでなく腫瘍が小さいうちに発見して手術を行うことが重要であり、難聴等の検査に関して常に本疾患の放射線学的除外を念頭におかねばならないと考える。